

現地通信

ラングーンを訪ねて

石 井 米 雄

東南アジア研究センターの「ビルマ・タイ地域調査計画」の一環として、1966年5月からバンコクに滞在して調査を進めているわたくしは、昨年11月5日から12日までの7日間、ビルマの首府ラングーンを訪れる機会を得た。以下はその短い旅行のメモである。

1

タイ国をとりまく国々が、ビルマ、ラオス、カンボジア、マレーシアの4カ国であることは、だれでも知っている。しかし、たとえば、バンコクからこれらの国々の首府、つまりラングーン、ヴィエンチャン、プノンペン、クアラルンプールへ自動車で旅行するにはどうすればよいか、という設問に答えられる人は意外とすくないように思われる。

この4つの首都のなかで、バンコクからもっとも近いのはヴィエンチャンである。10年前には、うねうねと続くコーラート高原の悪路が旅人の心の重荷であったが、1957年に竣工した、いわゆる「フレンドシップ・ハイウェイ」とその延長工事の完成は、この両都市の距離を乗用車でわずか1日の行程へと縮めてしまった。

マライ半島ぞいの道路に東北タイほどの目覚しい変化が見られないというのは、やはりこのふたつの地域の戦略的価値の相異によるのだろうか。クラ地峡の東端、チュンボン以南の道路がいぜんとして改善されていないので、陸路でクアラルンプールへ旅行しようとするれば、チュンボンから西折していったんインド海岸に出、それからラノン、タクアパを通過してパンガーまで南下し、さらに進路を東南にとってハジャイへ抜け、ここからサダオ経由でマレーシア入りをするとい

う、昔からのコースをとらなければなるまい。優に2泊3日はかかる。

カンボジアのプノンペンへの自動車旅行は、つい先頃までは、バンコク居住者の連休ドライブに最適のコースだった。すくなくともアンコール詣での起点をバンコクにとるということは、観光客の常識として通っていた。ところが先年タイとカンボジアとが断交して以来、両国間の交通はにわかに不便となり、昨年の7月22日からはアランヤプラテート・ポイペット間の国境が完全に閉鎖されて、それまでは特例として認められていた第3国人の出入国も、一切できなくなってしまった。

ラングーンとなると条件はさらに悪くなる。大ざっぱな地図で見ると、バンコクからラングーンへ入るには3つのコースが可能のように思われる。第1にバンコクからカンチャナブリを経由してモールメン、ペグー、ラングーンへと向うコース。このコースは、しかし、カンチャナブリから先の道が通れないので問題にならない。そのつぎはバンコクから中部タイの要衝タークまで北上し、そこから西行してメーソート経由モールメンに抜けるコース。このコースもタイ・ビルマ国境のメーソートで行き止りである。最後の、そして物理的に可能なただひとつの道筋は、北タイのチェンライからメーサイを通過してビルマ領に入り、ケントウンからシャン高原を西に進んで中央平原に達するとい

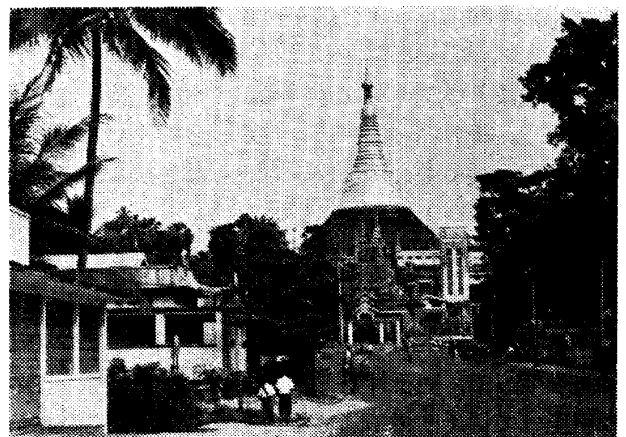


写真1 ラングーン名所のひとつ
シュエダゴンパゴダ

う大迂回路である。ところが、この唯一のルートも、ジャン州の治安状況の関係で外国人の通過は認められていない。この道だけではない。たとえ勇敢な探険家が、ジャングルの小径をたどってビルマ国境へたどりついたとしても、所詮かれの入国は認められないのである。なぜなら、ビルマへの入国査証には「陸路による入国は認めない」というただし書きがついているからだ。

こうしてみると、同じタイの隣邦といっても、その accessibility には大変な差があることがわかる。なかでもタイとビルマとの距離がいちばん大きい。航空機を利用する以外に、つまりドンムアンとミンガラドンというふたつの空港を空で結ぶ以外に、タイからビルマへ入る道はないのだ。

こうした事情もあって、かつて数年をバンコクに過し、機会あるごとに近隣諸国への自動車旅行を試みたわたくしも、ついに今日までビルマを訪れることがなかった。東南アジア研究センターから、ビルマの現状視察のためラングーンへ出張するようにとの連絡をうけたとき、わたくしは、久しく訪ねのこした未知の国をおとずれる喜びに胸をふくらませ、いそいそと入国の準備にとりかかった。

2

11月5日の夕方、バンコクのドンムアン空港を飛び立った UBA 機は、機首を西北に向けて快適な飛行をつづけていた。直線的な水路が幾何学的に交叉する低湿な中央大平原をとび越えてデルタの周辺部に達すると、大地はしだいに乾きを増し、そこここにゆるい起伏が始まる。気まぐれに大地をえぐって流れたホエイの跡。その間を縫うように牛車道がうねうねと走る。やがて大地の赤褐色はかげをひそめ、巨大な芋虫の背のように波うつジャングルの緑がすべてを覆いつくしてしまう。視界いっぱいひろがる緑の大海。わたくしは無限に続く森の中にひとりよりのこされた自分の姿を想像して身ぶるいする。これだったのか、数百年もの間このふたつの国の交流をさまたげてきた自然の大障壁は。1700km もの国境を共有しながら、ビルマとタイとは、このジャングルのふ厚い壁のわずかの裂け目を通して、時折押寄せて来ては、また戦利品を肩に引上げて行く、あの遠征軍のもたらす唐突な接触以外に、これといった接触を経験することができなかったのだ。

あたりはすっかり暗くなった。やがて左手に灯が見えて来る。ペグーだろうか。そう思う間もなく、機は高度を下げ始めた。

これからビルマを旅行される方のために、ここですこし具体的なことを書きとめておきたい。空港に検疫、入管、税関という3つの関門があるのはどこの国でも同じだが、ミンガラドン空港の入管では、旅券に入国の証印を押捺されるほかに、「滞在許可証」が別途交付される点がちょっとかわっている。私の査証には7日間の滞在を認めるとあったが、入国審査官は、滞在の延長を希望するときはあとでその旨申請すれば可能である、と親切に教えてくれた。

税関は公用旅券所持者に対してはほとんどフリーパスに近い。しかし持込み外貨の申告はきわめて厳重で、これをきちんとしておかないと出国の際トラブルを起すもことになる、と注意された。ここで交付された持込外貨申告書の写しは、持込んだ外貨を現地通貨に換金したり、そのまま使用したりするとき、いちいち証印を受ける必要がある。ビルマ通貨の持込みは一切認められない。カメラ、ラジオなども申告をもとめられた。

旅行客にとって、ラングーンでなによりも不自由するのは乗物である。バンコクなどでは簡単につかまるタクシーも、ここではよほど幸運でないかぎりおいそれとは見つからない。近距離の交通には「サイカー」と呼ばれる「輪タク」が便利だが、ちょっと遠いともう利用できない。

外国人の泊るホテルと言えば、ラングーン河沿いのストランド通りにある Strand Hotel か、郊外のイ



写真2 ストランドホテル通用口



写真3 インヤレークホテル

ンヤレーク湖畔にある Inya Lake Hotel の2カ所にかぎられている。わたくしは街中へ出かける便を考えて Strand Hotel へ泊った。このホテルの脇には旧式のプリマスが常時駐車しているので、タクシー探しをあきらめて以来、しばしばこれを利用した。ただしこの車は、もっぱら観光客目あてのハイヤーなので、すべて時間制なのが中距離の利用には都合が悪い。最初の1時間が10kyat, 2時間目が8kyat, あとは1時間増す毎に7kyat というのが協定値段である。

Strand Hotel はさすが老舗だけあってボーイの訓練がよく行きとどいていて気持がいい。エアコン付きのシングル・ルームが朝食共で米貨11ドル50セント。1ドルは4.7kyat だが、支払は指定外貨以外では認められない。ビルマのホテルで英語が通用するのは当然だが、日本語を解する職員の多いのにちょっと驚いた。細かいことだがラングーン市内の電圧220Vである。

3

今回のわたくしの訪緬の目的は、できるだけ多くのビルマ人研究者に会って、ビルマ人自身によるビルマ研究の現状について話を聞くことであった。ビルマが現在、一種の「鎖国」状態にあって、外国人との接触をあまり好まないということは出発以前からいろいろと耳にしていた。こういう状況では正面からアプローチする正攻法がもっとも無難であろうと考えたので、まず大使をお訪ねして、御助力を仰ぐことにした。「全面的に協力しよう」という高瀬大使のお言葉で、わたくしは百万の味方を得た思いがしたものである。事

実、もし大使の理解ある御協力と、在ビルマ日本国大使館館員各位とくに田中義具書記官の周到なアレンジメントがなかったならば、7日間の滞在もまったく為すところなく終ってしまったに違いない。この機会に心よりお礼を申しのべる次第である。

さて訪問の順序として、まず文化省と教育省を訪問してはどうかという田中書記官の御意見にしたがって、最初に文化次官補と教育次官補に表敬することにした。文化次官補の U Thein Dan はわたくしを快く迎え、文化省の管轄下にある研究機関について手ぎわのよいブリーフィングをしてくれた。ここで得た情報にもとづいて、Archaeological Department, Burma Historical Commission, National Library, National Museum を訪問することに決めた。

文化次官補訪問のあと、すぐに教育省をたずね、次官補の U Hla Saung に挨拶する。ここでは元ラングーン大学の教育学部長で、現在教育計画を担当しているという U Ba Min が同席して、ビルマの新高等教育制度について説明してくれた。わたくしは彼の話で、はじめてラングーン大学という大学がすでに正式には存在していないという事実を知った。U Ba Min によれば、ビルマの高等教育は、1964年「社会主義理念にもとづく高等教育の改革にかんするセミナー」の結果制定公布された「大学教育法」(Law No. 9 of 1964 of the Revolutionary Council) によって面目を一新することになったという。この改革は、既存の高等教育機関を細分して、17の universities & professional institutes へと再編成し、これをすべて University Administration (Director: Dr. Nyi Nyi 文部次官) の管理下におこうとするものである。その結果、ラングーン大学は RASU と略称されるラングーン文理大学と、経済大学、教育大学



写真4 ラングーン文理大学正門



写真5 経 済 大 学

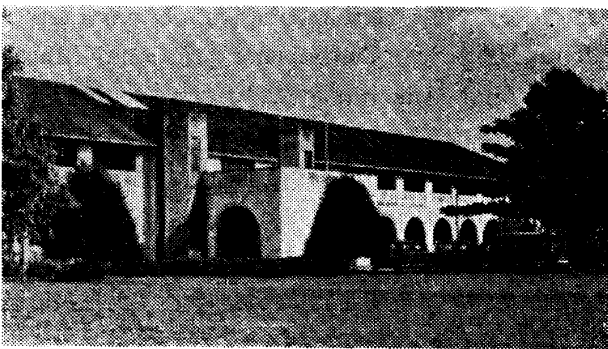


写真6 教 育 大 学

その他の単科大学にわかれることとなった。新学制にもとづく大学の主なものをつぎに掲げておく。

Rangoon Arts & Science University (RASU)
Mandalay Arts & Science University (MASU)
Institute of Education, Rangoon
Institute of Economics, Rangoon
Institute of Medicine (1), Rangoon
Institute of Medicine (2), Rangoon
Rangoon Institute of Technology
Institute of Veterinary Science & Animal
Husbandry, Insein
Worker's College, Rangoon
Institute of Agriculture, Mandalay
Institute of Medicine, Mandalay

さて東南アジア研究センターのこれまでの動向から見ても、最初にわたくしの関心をそそったのは、この国における人類学研究の現状である。人類学といえば、どうしても、いわゆる「少数民族」の研究が問題となりやすい。わたくしは文化省考古学局の訪問から、ビルマにおける諸民族の人類学的研究が、考古学局の下部機構である Ancient Culture & Literature 所属

の文化官の手によって進められていることを知った。この Ancient Culture & Literature という機関は、Burmese, Mon, Indigenous という3部門に分れ、それぞれに Senior Culture Officer がおかれているが、Burmese, Mon, 以外の民族を対象とする Indigenous Division は、その対象の性質上人類学者が Culture Officer に就任している。現在の「諸民族担当文化官」は旧 Rangoon 大学人類学科出身の U Min Naing である。U Min Naing はすでに「ビルマ諸民族誌」などビルマ語のモノグラフ6冊を世に送っている学究で、現在はさきにカレン州の Pa An と Pa Pawn の2カ所で実施したカレン族の現地調査の結果をまとめているとのことだった。なお Ancient Culture & Literature のある Culture House は No. 1, Church Road にある。

ビルマの人類学研究のもつひとつの流れは RASU の Dept. of Anthropology である。この学科は主任教授の Daw Khin Khin Oo (M.A., Chicago) の下に9人の teaching staff を擁している。現在 RASU では Anthropology は Psychology, History, Philosophyなどを major とする学生が minor として履習している。Daw Khin Khin Oo は、最近では大学院にのこった少数民族出身の学生で、自分の民族の人類学的研究を行なおうとする者が出て来たことは喜ばしい傾向だと語っていた。

ラングーン郊外の Kaba-Aye にある「国際高等仏教研究所 (International Institute of Advanced Buddhistic Studies) は、先年京大からも研究者が留学したこともある著名な研究機関であるので、やはり大使館を通じてアポイントメントをとってもらって訪問することにした。この研究所は、世界仏教徒会議

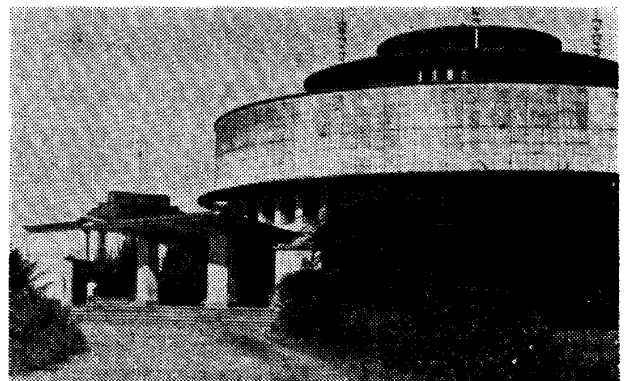


写真7 国際高等仏教研究所

の開催でわが国にも知られた World Peace Pagoda の裏側にある。ビルマの寺院では、境内に入る前にならず裸足になる習慣が厳重に守られているという話は前から聞いて知っていた。わたくしも今度 Shwe Dagon Pagoda におまいりしたとき、連れの運転手から靴下も脱ぐようにと注意されたことをおぼえている。しかし在家の機関であるこの研究所でパゴダと同じように、玄関で脱靴をもとめられたのにはちょっと意外な感じを受けた。ここには各国版の三蔵経、各国から寄贈された各種の仏像が安置されており、また瞑想の修法が行じられる神聖な場所であるからなのであろうか。わたくしは Saw Htun Hmat Win というシャン人の研究部長に案内されて所内を一巡した。この人は Harvard 大学出身の宗教学者である。ひとりの見学を終えてから、別棟で所長と会うことになった。現在の所長は U Hpe Aung という哲学者である。U Hpe Aung によれば、この研究所は在俗の信徒の立場から Theravada 仏教を研究しようとする機関であって、その点で僧伽とは一義的な関係をもたぬ点に特徴があり、研究者もかならずしも僧籍に入った経験をもたないとのことだった。この会談中、わたくしの隣りでさかんにメモをとっている人がいたので理由をたずねたところ、外国人との会談はすべて管轄官庁へ報告することになっているのだと説明され、もしや失言がなかったかと冷汗をかく思いがした。

RASU ではさきに述べた Dept. of Anthropology のほかに Dept. of History を訪問した。ここの teaching staff は6人で、内訳は西洋史2、ビルマ史2、中国史1、日本史1。このうち4人までが女性である。研究活動がかならずしも大学で盛んと言えないというのは、教育に重点をおくこの国の大学の性格から見れば当然のことかも知れない。したがってビルマ史の研究者をもとめようとすれば RASU よりむしろ Burma Historical Commission をたずねなければならぬまい。

Burma Historical Commission の活動は、不定期刊の紀要 *Bulletin of the Burma Historical Commission* の刊行で広く海外にも知られている。その研究室は大学構内の Mandalay Hall にある。つい最近のことだが、Chairman の Dr. Kyau Thet がその職をひいたので、現在は RASU Library の U Thein Han が代理をつとめている。前に文化次官補

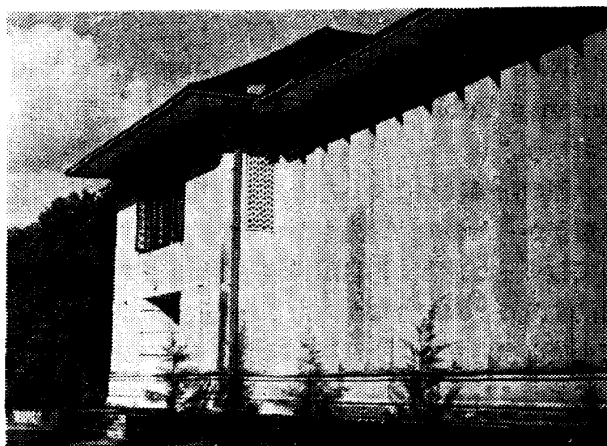


写真8 大学図書館

から、この委員会が、従来の王朝史偏重の歴史でない民衆の生活史の解明に力点を置いた新しいビルマ史の編纂に従事しているという話をきいたが、ここでは Col. Ba Shin, Dr. Gyi Gyi, Daw Kyan という3人の full-time senior researcher が、compiler となり、これを3人の junior researcher が補佐して歴史編纂が進められている。

ここまで来たついでに、U Thein Han の案内で Burma Research Society を訪れた。BRS の事務所は University Library の中にある。専任の職員がいないのか office はしまっていた。U Thein Han によれば、ここでは JBRS の1948年以後のバックナンバーが大てい入手できるほか BRS の50周年記念号、*Burma Pamphlets*, *Mon Texts*, *Text Publications: New Series* なども在庫があるとのことだった。

わたくしのタイでの仕事をもっぱら National Library で行なわれている関係上、ビルマの National Library も一度見ておくことにした。ここの Librarian は Daw Nyunt Myint という日本語の非常に達者な女性である。きけばラングーンの Institute of Foreign Languages に通って日本語を学習しているのだそうだ。この Institute には国際学友会の日本語教授のベテランである川原崎幹夫氏夫妻がコロンボプラン専門家として赴任して、日本語講座を開講している。Daw Nyunt Myint にはそんな訳で大変お世話になった。この Library は蔵書70,000冊というから決して大図書館ではないが、刊本のほかよく整理された写本室を有しているので、原史料について研究を進めようとする向の必ず訪ねなければならぬ場所であ

ろう。

図書館ではこのほか RASU の Library, Sarapay Beikman Public Library などがあることを附記しておこう。

今回の訪緬はわたくしにとって初旅でありまた時間も短かったので訪問先もかなり制約されたものとなってしまう。とくに自然科学系の研究機関はどれも訪問することができなかったことを残念に思う。そこで今後の参考までに主な研究機関について知り得た範囲のデータを書いておきたい。

1. Agricultural Research Institute, Gyogon, Insein

Chief: Dr. Kaung Zan

Division of Mycology: Dr. Kaung Zan

Division of Entomology: U Poo Nyo

Division of Agronomy: U Aung Khin

Division of Botany: U Pe

Division of Chemistry: U Khin Win
(Radio Isotope)

2. Union of Burma Applied Research Institute (UBARI), Rangoon

3. Burma Medical Research Institute, Zafar Shah Road, Rangoon

Director: Dr. U Mya Tu

Department of Haematology

Department of Bacteriology

Department of Pharmacology

Department of Nutrition

4. Research Institute of Forestry, Pyinmana

4

おわりに現時点でのビルマ現地調査の可能性について、今回の旅行から得た印象をしるしておきたい。

いうまでもなく現地調査を行なうためにはまずその国へ入国できることが第一条件である。つぎにすくなくとも調査に必要とする期間の滞在が認められ、同時に調査対象の存在する地点に接近する自由が与えられなければならない。

ところで現状では、この第一条件を満たすに必要とするヴィザの取得がまずむずかしい。(24時間の滞在を認める「通過査証 (Transit Visa)」以外はすべて本国経向が建前のように、調査を目的とした入国はほとんど認められていないようだ。)

つぎにたとえ何等かの形で入国できたとしても、国内旅行にはすべて事前の許可を必要とし、しかもたとえばマンダレーへ行くのでさえ申請は出発15日前に受理されなければならない。

さらに旅行許可が与えられたと仮定しても、治安上の理由から自由な通行はおそらく都市周辺とハイウェイに限定されるであろうことが予想される。

こうした状況下にあっては、センターがこれまでタイおよびマレーシアで試みた村落定着調査などはほとんど不可能であるといえよう。

文化省、教育省を訪問した際、わたくしはビルマに留学生を含む研究者を派遣することの可能性について質問したが、そこで得られた回答は、(1)ビルマ語学、ビルマ文学、ビルマ史等ラングーンに滞在して研究できる分野であれば可能であろう、(2)この場合でも日本国外務省—大使館—ビルマ外務省という外交チャンネルを通じてアプローチしてもらいたい、ということであった。

開放経済の繁栄を謳歌し、巷に外国製品の氾濫しているバンコクからラングーンに来てまず思い起されたことは、戦争末期によく使われた「物資不足」ということばである。Ne Win 将軍の外遊をひとつの契機として、経済統制が一部緩和され、食糧品など国内産の農林水産品の一部が自由に市場に出廻るようになったと言われるが、商店の店先を飾る品物はまだまだきわめて乏しいといわなければならない。ボールペン、マジックインキなどという、バンコクでは露店で投売りされているような品物さえ、ここでは得難い貴重品に属する。

アナクロニズムとさえ思われる「鎖国」を断行して、ただひたすらに社会主義国家建設に邁進するビルマにとって、現在まさに「非常時」なのだとわたくしは思った。(1966年12月31日 バンコクにて)

附 記

本文にも記したように、今回の旅行では高瀬侍郎大使をはじめ在ビルマ日本大使館の館員各位、とくに田中義具書記官、武田道郎書記官、吉野元之助書記官には格別の御面倒をおかけした。また川原崎教授御夫妻の御厚情も忘れることはできない。記してお礼にかえたいと思う。